國學院大學学術情報リポジトリ

出版物紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/1925

出版物紹介

國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集『〈日本文化〉はどこにあるか』

（春秋社、2016年８月）

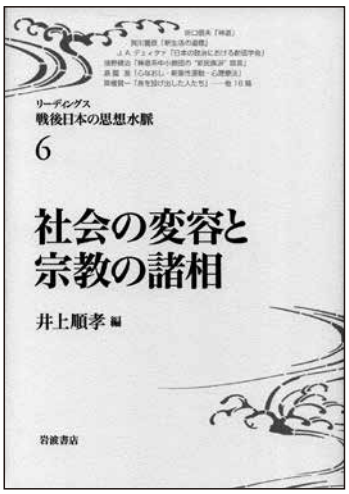
内容紹介……

本書は2015年12月24日、25日の両日、國學院大學日本文化研究所設立60周年を記念し、「『日本文化』研究の展望」というテーマで開催された公開学術講演会と国際研究フォーラムの内容に基づくものである。国際研究フォーラムの講演に関しては、本書の趣旨に合わせて発題者に新たな論文を書き下ろしていただいた。本書の背景にあるものについては編者が序論の中で解説している。従来の「日本文化は独自のもの」という前提を問い直し、グローバル化や自然科学の視点を取り入れることで〈日本文化〉について再考することが本書の趣旨である。本書所収の論文は以下の通り。篠田謙一「DNAで読む日本の形成史」、スチュアート・E・ガスリー「神仏はなぜ人のかたちをしているか――擬人観の認知科学」、河野哲也「アフォーダンスと生態学的倫理の構築」、ウィリアム・W・ケリー「ローカルな生活世界から見える現代日本――人類学者の視点から」、井上順孝「現代日本宗教のリバースエンジニアリング――今を観察することから始める」。

井上順孝編『リーディングス戦後日本の思想水脈 第６巻　社会の変容と宗教の諸相』

（岩波書店、2016年11月）

内容紹介……



本シリーズは、戦後日本思想史上の重要な文献を様々なテーマごとにまとめた全８巻の読本である。現代日本社会が直面する課題に取り組む手がかりを、戦後日本の「思想水脈」に探ることを目的とし、敗戦直後から東日本大震災までの時代の文献を取り上げている。「社会の変容と宗教の諸相」をテーマとする本巻は、戦後日本の宗教の変遷を理解する上で有益な文献を収録したもの。それら全22編の内容は、教団自身の言説、学術研究、ジャーナリズムなど様々な分野に及んでおり、多角的な視野から戦後日本の宗教について学ぶことができる。本文中には読者の理解を助けるナレーションやコラムが挿入されているほか、巻末に編者による長編の解説「社会の変容と宗教――どこに軋みを感じたのか？」が付されており、戦後日本の社会変容と宗教の展開について一望することのできる構成となっている。

松村一男・平藤喜久子編著『カラー版　神のかたち図鑑』

（白水社、2016年11月）

内容紹介……

本書は松村一男・平藤喜久子・山田仁史編『神の文化史事典』（白水社、2013年）の姉妹編となるもの。前著とは異なり、神々の図像を総天然色で掲載している点に本書の特色がある。掲載されているのは、ギリシア・ローマ、北欧、ケルト、スラヴ、アフリカ、アラブ、インド、中国、東南アジア、オセアニア、日本、南北アメリカなど、世界中の神話から選び出された400以上の神々。それらの図像は、「天体」「時間」「異界」「自然」「神」「超自然」「動物」「植物」「道具」「人間」という10個のテーマに分類され、各テーマがさらに細かい項目に分類されている。世界中の多様な神話に触れるだけではなく、時代や文化によって異なる神の描き方を知ることができる。巻末に掲載図版一覧、神名索引付き。

平藤喜久子『日本の神様と楽しく生きる―日々ご利益とともに―』

（東邦出版、2016年12月）

内容紹介……

日本人の身近にいる「学問の神様」「縁結びの神様」などの、さまざまな「～の神様」。本書はそのような神々の正式な名前と神話を一般の読者に向けてわかりやすく解説したものである。本書全体は「冬」「早春」「春」「初夏」「盛夏」「秋」と季節ごとに章立てされており、各季節の行事にまつわる神様をカラフルなイラスト付きで紹介している。さらにオオモノヌシと「そうめん」の関係など、それぞれの神様にゆかりのある風習や神社、お祭りなどもあわせて紹介されている。正確な知識によりながら、読者が暮らしの中に息づく神様を発見し、親しみが持てるようになることを目指した構成となっている。神道や神社に関するコラムのほか、巻末には「神様の系譜」と神仏名・寺社名から引ける索引も付いている。

宗教者災害支援連絡会編、蓑輪顕量・稲場圭信・黒﨑浩行・葛西賢太責任編集『災害支援ハンドブック―宗教者の実践とその協働―』

（春秋社、2016年６月）

内容紹介……

頻発する地震や自然災害などに備えて、支援のほか知っておくべき情報が詰まったハンドブックである。東日本大震災の発生から５年の間に蓄積された宗教者災害支援連絡会（宗援連）での報告会をもとに、最初の「総論」では、災害発生時の宗教の役割にみた社会貢献と公益性についてまとめる。第一部「東日本大震災で起こったこと」では、震災時に被災地で起こったことと、宗教が関わる様々な事例を挙げる。続く第二部「東日本大震災から考える」では、震災後の「心のケア」や被災者への支援を中心に宗教の果たした役割・実態と、課題・解決法などを明示・整理する。第三部「今後への提言―宗援連の経験から」では、今後の災害に備えた提言などを、宗教や宗派の壁を超えて具体的にまとめ上げたものである。

神社新報社編『東日本大震災　神社・祭り―被災の記録と復興―』

（神社新報社、2016年７月）

内容紹介……

本書は、神社新報創刊70周年の記念事業の一環として、板井正斉・黒﨑浩行・藤本頼生・牟禮仁・茂木栄・前田孝和各氏が編輯委員を務め、東日本大震災による神社・神職の被災状況と神社界の動向を中心とした記録を、整理・出版したものである。本書は「本編」・「写真編」・「資料編」の三冊より構成される。「本編」については、第１章「被災神社・神職の状況と提言」第２章「支援活動」第３章「祭り・芸能の被災と復興」第４章「諸宗教の活動」第５章「関係論文その他」より成り、それぞれの章題に関連した論考が60以上掲載されている。また「写真編」は、被災状況や支援活動、慰霊・復興祈願祭等の関連写真を数多く載せる。そして「資料編」には、「東日本大震災神社関係年表」ほか、神社界の動向のわかる各種関連資料、「神社新報」紙面、東日本大震災関係祝詞などが収録されている。本書中でも取材対象の範囲が限定される点は触れられているが、その分、詳細・専門的な構成となっている。

塚田穂高編著『徹底検証 日本の右傾化』

（筑摩書房、2017年３月）

内容紹介……

「日本の右傾化」が叫ばれるようになってきたが、では実際に現代日本社会で何が起き、どこまで進んでいるのだろうか。本書は、「日本の右傾化」と大きく括られているそれをいったん限られたテーマに分解・細分化し、各領域の専門家が自身のフィールドについて信頼できるデータと資料を駆使しながら検証し、その結果を重ね合わせることでこの問いに迫る。全体は、「壊れる社会」「政治と市民」「国家と教育」「家族と女性」「言論と報道」「蠢動する宗教」の６部・21章・400頁からなり、研究者・ジャーナリスト・新聞記者・編集者らが、日本文化・宗教を含む多様なトピックを論じている。巻末には、ブックガイドと関連年表も付されている。研究所スタッフの塚田穂高が編者を務めるとともに、「第21章「宗教の右傾化」はどこにあるのか―現代日本「宗教」の類型的把握から―」を執筆している。

寺田喜朗・塚田穂高・川又俊則・小島伸之編著『近現代日本の宗教変動―実証的宗教社会学の視座から―』

（ハーベスト社、2016年６月）

内容紹介……

日本社会における宗教構造の変化――近現代日本の宗教変動を実証的に解明する研究実践を通じて、〈ディシプリンとしての宗教社会学の共有財産〉を示し、その継承を目指した論文集。全体は約400頁。序章と「第Ⅰ部 宗教運動論の展開」「第Ⅱ部 地域社会と宗教」「第Ⅲ部 国家と宗教」の全10章、ならびに３つの「研究動向」から構成されている。研究所スタッフでは、塚田穂高が編者のひとりを務め、「第１章 教団類型論と宗教運動論の架橋―日本の新宗教の事例から―」（共著）「第４章 霊波之光教会におけるカリスマの成立と継承―霊能の指導者集中型教団の発達課題―」「第６章 政教分離訴訟の宗教社会学―北海道砂川市有地上神社問題のフィールドから―」の３章を、問芝志保が「第８章 穂積陳重の先祖祭祀論―「国体イデオロギー」言説の知識社会学―」の執筆にあたっている。